⑭ 思い堀①

むかし、むかし、三郎太という若者が住んでいたんだど。

三郎太は、いつも川や沼で鯉・鮒・なまず・どじょう等を取っては、町に売りに行っていたんだど。三郎太は、おがや[注1]と二人暮らしで、親孝行な評判息子だっただど。

そんな三郎太に隣村のきれいな「お咲」という娘が、ほのかに思いをよせていたんだど。そんなことは、露知らず真面目一方の三郎太は、毎日判でおしたように、魚を取っては町に売りに行くという日を送っていたんだど。

ある時、大雨が続いて、魚取りに出られない日が続いたんだど。三郎太は、空を見上げながら、

「今日あたりは、そろそろよがんべなー。」

と言うど、おがやが、